HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナショナルな欲望の回帰 ： １９９０～２０００年代のロシア・ポストモダニズム文学の変容［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	松下, 隆志
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12042号
Issue Date	2015-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60490
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Takashi_Matsushita_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：　松　下　隆　志

学位論文題名
ナショナルな欲望の回帰：1990～2000 年代のロシア・ポストモダニズム文学の変容

本論文は、1990 年代から 2000 年代にかけてのロシア文学の変容過程を、90 年代に顕在化したロシア・ポストモダニズムの特殊な展開という観点から検討し、意味づけることを目的としている。

従来の研究が示すように、ロシアのポストモダニズム文化は、ソ連イデオロギーの正当性が危機に瀕し、社会のシミュレーション化現象が起こった後期社会主義社会を背景としており、後期資本主義社会を背景とした欧米のポストモダニズムとは性格を異にしている。しかしロシア・ポストモダニズムを明示的に唱えはじめた 1990 年代ロシアの理論家たちは、欧米的なポストモダニズムの指標を直に自国文化論に応用するとともに、モダニズムから社会主義リアリズムを経てポストモダニズムにいたる特殊ロシア的な文化発展の経緯について、それぞれ独自の仮説を展開した。

こうしたポストモダニズムへの「擬態」は、ソ連崩壊で危機を迎えた自国文化のアイデンティティを世界文化のコンテクストで説明し直すためには有効だったが、反面でこの時代の文化論に特殊な偏向を与える結果になった。ポストモダニズム論がナショナル・アイデンティティをめぐる本質主義や、伝統的な「西欧とロシアの対比」論と結びつき、ひいては本来ポストモダニズムとは縁遠いはずの、ナショナリスティックなロシア特殊性論という「メタナラティヴ」の温床になったのである。

そうした特殊事情を前提として、著者はこの時代のロシア文学を三つの段階に分けて分析している。第一は 90 年代の文芸の中で上記のような西欧とロシアのポストモダニズムの差異が露呈していく過程であり、第二は早くもロシア・ポストモダニズムの「終焉」が宣言された 90 年代後半から 2000 年代の文芸で「ナショナルな欲望」への回帰志向が顕在化していく過程であり、第三はそうした「ナショナルな欲望」の再構築と脱構築自体が創作のテーマとなる段階である。

序論「「ロシア・ポストモダニズム」というパラドックス」では、ポストモダニズム論が国民性論や東西文明比較論と本質的な親和性を持つ「ロシア・ポストモダニズム」の特殊性の問題が、ジャン＝フランソワ・リオタール、イーハブ・ハッサン、フレドリック・ジェイムソンなどによる欧米のポストモダニズム論との比較によって提起される。

第一部「ディスクールの変容」では、1990～2000 年代にかけてのロシア・ポストモダニズムのディスクールの変容過程の分析が行われる。

第一章では、ロシア・ポストモダニズムのディスクールにおいて一種のメタナラティヴとして機能した「空虚」の概念の変容が論じられる。ソ連後期のモスクワ・コンセプチュアリズムと 90 年代のロシア・ポストモダニズムにおける空虚概念の差異が解析され、作家 V・ペレーヴィンの創作にその展開が跡づけられる。

第二章では、現代ロシア文学における「自由」観の変遷が、欧米のリベラルな国家との比較に基づいて分析される。欧米的な既得権としての自由観にロシア・ポストモダニズム的なラジカルな自由観が対比され、90 年代以降のロシア社会における両者の対抗や交代が、同時代の文学作品から析出される。

第三章では、現代ロシアの文芸に現れたアイロニーの要素に注目し、ロシア・ポストモダニズム退潮の要因の一つとして挙げられた「アイロニーの終焉」（V・クーリツィン）のプロセスが具体的に検討される。第一次チェチェン戦争と第二次チェチェン戦争をそれぞれ描いた小説や映画作品が比較分析される。

第二部「欲望の回帰」では、2000 年代の文学作品を題材に、ロシア・ポストモダニズムの言説が抱えていたナショナルな特質が新世紀の文学に回帰していく過程が、ロシア的・ソ連的両面から考察される。

第四章では、ロシア・ポストモダニズムの重要な先駆者と見なされるＹ・マムレーエフの近年の著作に現れた、思想的・文学的「転向」が、ロシア的回帰の典型例として分析される。70 年代のこの作家に特有な唯我論（「我教」）が 90 年代以降「永遠のロシア」と呼ばれるナショナルな思想へと変化していく経緯が解明され、その根拠と動機が考察される。

第五章では、2000 年代にデビューした若手作家たちの文学に見られる「ソ連回帰」の傾向が分析される。「新しいリアリズム」と呼ばれるこの潮流が 90 年代ポストモダニズムを否定しつつ、ポストモダニズムの問題意識を引き継いだ上で超克しようとする過程で、ソ連を自分たちの「現実」として再提起する経緯が分析される。

第三部「欲望の解体」では、上述のナショナルな回帰の意味が考察されると同時に、そうした傾向への批判や脱構築の契機を持つ作品の分析が行われる。

第六章では、ロシア・ポストモダニズムの中心作家Ｖ・ソローキンの 2000 年代の創作を題材として、ナショナルな回帰の芸術的展開のケーススタディが行われる。近未来に復活した架空のロシア帝国を舞台に、「ロシア」の自己イメージが実際には欧米や中国といった「他者」の存在抜きには成立し得ないこと、一見正反対のロシア的なものとソ連的なものとが多くの共通項を抱えていることを明らかにした作品が、ナショナルな欲望の「再(脱)構築」(再構築と脱構築の同時進行)の例として分析される。

第七章では、本論文で扱った問題が、ルネ・ジラール的な意味での「欲望の模倣」の観点から捉え直され、西欧文化の「陰画」としてしか自国文化を語ることができないという、「ロシアの牢獄」的状況が析出される。また同時に、そうした欲望の再生産・「牢獄」からの脱出の契機を孕んだ文学作品の数例が分析される。

結論では、以上の議論を踏まえて、ロシア・ポストモダニズムの文脈で見たソ連崩壊後の現代ロシア文学の変容過程が通観・整理される。

著者の総括によれば、ロシア・ポストモダニズム論は、西欧を模倣しつつ自国の独自性論によって西欧文化を超克しようとする伝統的な心性にとって便利なツールとなったが、その結果西欧文化の陰画としてしか自国文化を語ることができないという、「ロシアの牢獄」というべき状況が露呈した。現代ロシア文学のある種の試行は、そうした閉塞の克服という課題に動機づけられている。